



デア ハーフエン Der Hafen

Nr. 74
2025年4月-6月

ドイツ連邦議会選挙の結果と今後の展望

－ 極右台頭より重要な変化 －

横浜日独協会会長 成川 哲夫

2025年2月23日に行われたドイツの総選挙は、日本国内でも大きな注目を集めた。特に「ドイツのための選択肢 (AfD)」が前回選挙の約2倍の得票率を獲得したことから、「欧州の最後の砦が崩れつつある」との論調が日本メディアでは目立った。しかし、今回の選挙結果を冷静に分析すると、むしろドイツの政治は安定化に向かう可能性が高い。極右の台頭だけでなく、キリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)が第1党となり、社会民主党(SPD)との連立が確実視されていることこそ、今後のドイツ、ひいてはヨーロッパの未来を左右する重要なポイントである。

(1) CDU/CSU-SPD 連立の可能性と政策運営の安定化

CDU/CSU と SPD の連立は、過去にも「大連立 (Große Koalition)」として経験があるが、現在のドイツの状況を考えると、以前とは異なる意義を持つ。これまでの3党連立 (SPD、緑の党、自由民主党) は政策の方向性が一致せず、エネルギー政策、財政規律、外交方針などでたびたび足並みが乱れた。そのため、ドイツ国内外の投資家や経済界からは、政策の不透明さに対する懸念が高まっていた。

しかし、CDU/CSU と SPD の連立
が成立すれば、政策決定のスピード
が上がり、特に防衛費の増額、
産業政策への資金投入、エネルギー
問題への対応がより現実的になる。欧州全体の安全保障環境が厳しさを増す中、ドイツの防衛力強化がよりスムーズに進む可能性がある。



(2) 極右の限界とドイツの政治潮流

AfD の躍進が欧州全体の極右台頭と連動していると見られがちだが、必ずしもそうとは言いきれない。AfD は一般に極右政党と見なされるものの、党内には2015年の難民危機を契機に CDU 内の右派の一部が流入するなど、異なる政治的背景を持つ勢力が混在している。また、AfD のトランプ大統領との関係強化は、同氏のウクライナ政策に対する反発が高まる中、支持層の一部離反を招く可能性もある。

ドイツ国内では AfD の台頭に対する警戒感が広がり、特に都市部や若年層ではリベラル派の結束が強まる傾向が見られる。今後、AfD のさらなる伸長を抑え込めるかどうかは、新政府が移民政策の改革に取り組み、産業政策を通じて国内産業の競争力を強化し、経済活性化をどこまで実現できるかにかかっている。

(3) ドイツ経済の課題と日本企業の経験からの示唆

ドイツ経済が直面する最大の課題は、高いエネルギー

コストを前提とした産業構造の再構築である。ロシア産エネルギーの供給停止後、ドイツの製造業は競争力低下に直面し、一部の産業では海外移転の動きが加速している。ここで参考になるのが日本企業の経験である。日本も過去、円高と米国との貿易摩擦によって生産拠点の海外移転を余儀なくされ、結果的に国内産業の空洞化を招いた。ドイツはこの教訓を活かし、単なるコスト削減のための移転ではなく、エネルギー効率の高い産業構造への転換を進める必要がある。エネルギー政策の見直しやエネルギー多消費産業の適切な配置が求められるだろう。

(4) トランプ再登場と日独の戦略

トランプ氏が再登場し「米国第一主義」を掲げている。対中制裁関税の強化や日独製品への高関税措置が取られる可能性が高い。特に、自動車産業やハイテク分野への影響は大きく、北米市場での競争環境が一変する恐れがある。この状況下で、日独はサプライチェーンの強靱化に加え、関税リスクを軽減する戦略を強化する必要がある。北米市場での現地生産拡大は不可避であり、リスク分散のためにも、日独合弁事業の増加が有効な手段となる。また、米国依存を抑えるため、東南アジアやインドでの共同投資やインフラ開発など、新興市場での協力も重要な選択肢となる。

(5) ウクライナ問題と欧州防衛の行方

米国がウクライナ支援を停止し、ロシアとの「条件付き停戦」に向かう可能性が高まっている。この場合、欧州諸国は防衛自主化を加速せざるを得なくなる。しかし、ドイツを含む EU 諸国が短期間で米国の軍事的役割を補完することは困難であり、フランス・ドイツ・ポーランドの連携強化などを通じ、米国の後ろ盾を維持しつつ時間を稼ぐ必要がある。

(6) 欧州の自立と日独協力の可能性

米国主導の集団安全保障体制が崩壊の危機にある中、ドイツは EU 内で防衛協力を進める選択肢を持つ。一方、日本はアジアに同様の枠組みがなく、日米安保の片務性を考えれば、トランプ政権下でさらなる負担増を強いられる可能性は高い。しかし、日本が取るべき対応は受動的なものではなく、より戦略的であるべきだ。防衛力の強化と同時に、西側諸国のみならずグローバルサウスの国々とも経済・技術・エネルギー分野での可能な協力を深化させ、広範な安全保障ネットワークを構築する道がある。特に、欧州との連携強化はエネルギー安全保障や防衛産業分野での協力を拡大する契機となる。日本の選択は、単に自国の未来を左右するだけでなく、国際秩序全体にも大きな影響を与える。その意味で、今回のドイツ総選挙は、日本にとっても重要な示唆を含む出来事と言えるだろう。

「都市とユダヤ人」

横浜商科大学学長 羽田功氏講演会

事務局長 津澤 元一



1月17日(土)午後、横浜商科大学学長、羽田功氏による講演会が横浜市技能文化会館で開催されました。羽田氏は、慶應義塾大学文学部卒業、同大学院博士課程単位取得後、慶應義塾大学経済学部教授、慶應義塾高等学校校長等を経て、2023年10月より横浜商科大学学長を務められています。

専門研究分野は、19世紀末から20世紀初頭におけるドイツ系ユダヤ人の文化状況全般に関する調査・研究、ヨーロッパにおける「ユダヤ人像」の成立と変遷に関する多角的調査・研究ということで、現在まで多くの著作・翻訳書を刊行されています。また個人的には、羽田氏は小学校の同級生で、1980年代に、研究でミュンヘンに滞在されていた彼を訪問しお世話になった他、最近も小学校時代の同級生数名とご一緒する機会があり、そこで今回の講演をお引受け頂いたという経緯があります。更に最近、当協会の成川会長が親しくさせて頂いているドイツの銀行CEOと羽田氏とは40年来の親友であるということも分かり、ドイツ関連のご縁も感じています。そして当日の講演ですが、古代からのユダヤ人の歴史から始まり、中世、近代にユダヤ人社会がどのような経緯を辿り、彼らが世界の中でどのように受け入れられてきたかを中心に、分かり易くご説明を頂くことになりました。

冒頭、欧州におけるユダヤ人の歴史は、古代から19世紀にかけての「ユダヤ人解放」までと、それ以降、そして1948年のイスラエルの建国以降の3つの時期に分けて見ていく必要がある、そしてこの日は、近代までの2つの時期に焦点を当てること、及びそれをドイツの都市、就中フランクフルトを中心に考察していくとの全体感が示されました。そして「ユダヤ人問題」というのは、ユダヤ人が、彼らが定住した社会にどのように受け止められてきたか、あるいは社会の構成員たちがユダヤ人に対してどのような態度決定を行ったのかという視点から見ていく必要がある、しかし歴史的には、西欧社会はそれを先延ばしにしてきたというコメントが加えられました。

まずは、カナン「約束の地」、モーゼ「出エジプト」、そしてローマ支配による「離散(ディアスポラ)」等「ユダヤ教」の特徴も含めた古代のユダヤ人の歴史が語られます。そして10世紀までは特定のコミュニティを持たなかったユダヤ人が、それ以降ドイツはライン河周辺のマインツ、シュパイアーといった街に成立していったことが記録に残されているとのこと。それらの街でユダヤ人が受け入れられた理由は政治的、経済的なもの等数々ありますが、面白いのは、そこではユダヤ人が支配者の一種の「財産」とされ、支配者には保護義務と共に所有

権と処分権があったという指摘です。特許状でユダヤ人を優遇するかと思えば、社会の敵として彼らを「迫害(ポグロム)」することが始まるのは第1次十字軍以降、14世紀半ば以降の「黒死病(ペスト)」の流行がこれを加速させたこと。社会にとって、ユダヤ教徒といった少数派は、時に利用し、時に虐める格好の存在であったということになります。

神聖ローマ帝国(ドイツ)はローマカトリックの強い影響下にありましたが、それでも15世紀以降、ライン河沿いの都市に定住するユダヤ人コミュニティが発展していきました。夫々の都市で景色は異なっていますが、その中で民族間の平和的共存が比較的進んでいたのが、フランクフルトであったということ。しかし、それでもユダヤ人は「Judengasse」というゲッターに押し込まれ、時として周辺住民からの迫害も受けることになりました。他方、13世紀にローマで開催された「第4ラテラノ公会議」での「反ユダヤ的決議」は依然影響力を残しており、18世紀のフランクフルトでも、ユダヤ人であることを示すための「服装規程」等も生きていたということで、「差別」は常に残っていたということです。

17世紀以降の啓蒙思想、特に自由・平等・博愛を謳うフランス革命の人権思想の広がりもあり、ユダヤ人の「解放」も進むこととなりますが、ユダヤ人の置かれていた歴史的な状況は、ハイネの「バハラッハのラビ」やゲーテの「詩と真実」等でも触れられています。ユダヤ人であったハイネはドイツでは居づらさを感じ、相対的にユダヤ人に寛容であったフランスに移住することになったこと、しかしそのフランスでも19世紀末には、「ドレフュス事件」というユダヤ人に対する冤罪事件が発生したこと、あるいはあの文豪ゲーテでさえ、反ユダヤ的な歴史書を幼いころから愛読していた、更にこうしたユダヤ人の存在が、同時期におけるフィヒテ等による「ドイツ人」の再認識に繋がったという指摘も、この問題が近代の欧州で一筋縄ではいかないものであったことを感じさせられました。

講演後の質疑では、参加者より、かつてハンガリーのブダペストで大きなシナゴグを訪問した経験を踏まえ、ハンガリーのユダヤ人社会についての質問があり、それについて羽田氏は、そこが当方ユダヤ人の一つの大きな拠点であったことを説明されました。また別の参加者からは、シェイクスピアの「ベニスの商人」でも取り上げられていたキリスト教やユダヤ教における「利息」の是非についての問いがありましたが、これは異教徒間では許容されていたとのことでした。

当日の講演では、1948年のイスラエル建国以降の新たなユダヤ人社会を巡る課題については多くは触れられませんでした。昨今のガザ情勢や、欧州の一部での反ユダヤ主義顕在化の兆し、更にはこうした課題への、米国のトランプ新政権の対応等を考える上で、この日の講演は多くの示唆を与えてくれました。こうした現代の課題について、また機会を改めて羽田氏の分析をお伺いしたいという気持ちを抱いた当日の講演でした。

カール・ヴァレンティン

Karl Valentin (1882-1948)の世界 コメディを通じて知るドイツ語のこぼれ遊びと文化



会員 フェリス女学院大学
高雄 綾子

2月15日(土)の午後、ミュンヘンご出身で神奈川大学国際日本学部教授のブッヘンベルグ先生 (Prof. Dr. Stefan Buchenberger)

による、「カール・ヴァレンティン Karl Valentin (1882-1948)の世界」が開催されました。本来「ファレンティン」となるドイツ語名が「ヴァレンティン」とされることと、先生のお名前の日本語表記の難しさを重ね合わせ、クスクスと笑いを誘って講演が始まります。20世紀初頭にミュンヘンで大活躍したコメディアンであるヴァレンティンは、独特の風刺やコスチューム、セリフ回しで、「ドイツのチャップリン」とも評されます。1902年に楽器の演奏でデビューしたのち、相方コメディエンヌのリーゼル・カールシュタット Liesl Karlstadt (1892-1960) との掛け合いスタイルを確立して行く経緯が、1910~1920年代のミュンヘン市庁舎建設の進展や、ラジオ、無声映画、トーキーなどの技術の発展の様子とともに紹介されました。ここでYouTube動画を映した途端、なぜか先生のPCとプロジェクターの接続が切れてしまい、急遽、わたし(高雄)が持参していた私用タブレットに切り替えるというハプニングが発生! ホーム画面は愛犬のダックスフントであふれていたのですが、実は先生も柴犬飼いの愛犬家のため、快く(?)ご講演を続けてくださいました。

そして、無声映画時代にプレヒトが台本を書いた「Mysterien eines Frisiersalons」(1922)のシュールなドタバタ劇が紹介された後、ラジオで大ヒットした数々の言葉遊び、「Buchbinder Wanninger: たらい回し(ビュロクラシーへの個人の無力さ)」、「Semmelknödeln: ゼンメルクネーデルン(不条理で意味のないことばの羅列)」、「Die Brille: メガネ(灯台下暗し)」などが説明されます。そしてこれらはバイエルンの方言やミュンヘンの文脈で表されるため、北ドイツ出身者がその面白さを理解するのは難しいだろうとも。なるほど、日本語でも「そば屋の出前みたい」という表現や落語の「寿限無」は、エピソード抜きに理解出来ないし、「メガネ見えない」話はサザエさんの波平もやってたし…。シチュエーションと結びついた言葉が持つ独自の意味と面白さは、まさに文化の体験であるという事例を鮮やかに示してくださいました。

そして1930年代の不安な時代は、トーキーの幕開けによる、映像と言葉あそびを巧みに組み合わせたヴァレンティンの絶頂期とも重なり、「Orchesterprobe」(1933)、「Im Schallplattenladen」(1934)、「Der verhexte Scheinwerfer」(1934)、「Der Theaterbesuch」(1934)、「Der

Firmling」(1934)、「Donner, Blitz und Sonnenschein」(1936)と、次々と作品が発表されていきます。初老の労働者が成人した息子のお祝いに奮発して高級レストランに行き、階級の違いから周囲とコミュニケーションが取れずドタバタ喜劇を繰り広げる「Der Firmling」(1934)は、住む場所や経済力、階級の違いによって言葉が通じない不条理さを表現しています。政治風刺ではなく生活に密着したコメディ映像は、とにかく暗い政治状況が強調されがちな当時の庶民の暮らしぶりを知ることのできる、とても興味深いものでした。

ブッヘンベルグ先生は、ヴァレンティンの作品は、ドタバタ劇のカオス(Chaos)やことば遊び(Sprachwitz)によって不条理な現実を際立たせることで、直接的なメッセージがなくとも聴衆に考えること(Nachdenken)を促していると説明します。ヴァレンティンは、ヒトラーについても、「彼の名前がKräuterじゃなくて良かったね、ほら、Heilkräuterになっちゃうから…」と言って茶化す程度しか言及しませんでした(1937年に偶然、写真スタジオでふたりが会ったときも、和やかに談笑したそうです)。しかし彼のシュールな笑いは、戦後のミュンヘンっ子にとって悲観的すぎると捉えられ、ラジオの視聴者は激減し、1948年、なんと真冬の劇場に閉じ込められたことから肺炎を患い亡くなったそうです。

彼とリーゼルは、サミュエル・ベケットやベルトルト・ブレヒト、ゲルハルト・ポルト、ロリオ、ヘルゲ・シュナイダーなど、名だたるアーティストたちに大きな影響を与え、ドイツのポップカルチャーの重要な基盤を形成しました。そして、ミュンヘンの心臓部ともいえるイザール門には博物館「Valentin-Karlstadt-Museum (これも言葉遊び)」が、ヴィクトゥアリーエン広場には二人の銅像が建てられています(博物館は2026年春まで改装のため閉鎖中)。さらにヴァレンティンの名を冠した小惑星や、ヴァレンティンっぼさを表す「ファレンティネスク」という言葉までであるように、今もミュンヘンの日常生活やミュンヘンっ子の気質に色濃く残る「ローカル・ヒーロー」なのだそうです。その後の質疑応答にもファレンティネスクで受け答えくださった先生のおかげで、終始、笑いありハプニングあり、そしてふっと考えさせられる瞬間ありの、とても楽しめる講演会でした。YouTubeにたくさんのヴァレンティンの動画があるので、ぜひ言葉あそびを楽しんでください!



故島村武男会員を偲ぶ

「二期会望年コンサート」に出席して

名誉会長 早瀬 勇

「島村です」と、電話の向こうから力強く、美しいバリトンが響くことはもうありません。NHK E テレの『いい声トレ』が評判になったあの張りのある声は、若き日に本場イタリアでベルカント唱法（Belcanto）を学んで以来、79歳で死の床に就く2024年6月6日まで、一日も休まずトレーニングを続けた成果でした。

ドイツでは、日本人としては珍しい国立歌劇場の専属歌手として活躍され、国際的オペラ歌手として名を馳せました。ドイツのワグナー歌手とともに新国立劇場で演じたニーベルングの指輪のアルベリヒ役は忘れられません。

また2022年11月10日、みなとみらいホールで『横浜日独協会名誉会長早瀬勇氏への感謝によせて』という冠をコンサートに付して、労って下さった島村先生の温情には感謝の言葉もありません。

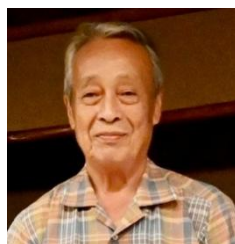
去る12月28日、磯子公会堂での追悼コンサートには南雲副会長と筆者夫妻が出席。二期会の教え子約20名が、それぞれ島村先生の教えを体してオペラのアリアを熱唱しました。最後の歌は、生前録画された先生本人の「千の風になって」でした。「私のお墓の前で泣かないで下さい。そこに私はいません」という、磨き上げられたバリトンでした。熱唱の余韻が残る舞台上で、先生の遺影を抱えた明美夫人（当会会員）を囲んで撮られたのがこの写真です。

当協会の設立以来、節目節目でベルカントを披露して下さった先生が、いつまでも若々しく、「千の風」になって飛翔されることをお祈りいたします。合掌



故黒崎稔前副会長への追悼文

副会長 向井 稔



黒崎稔前副会長

昨年末 12月22日黒崎前副会長は享年85歳で永眠されました。本当に急逝でありました。その12月の初めに行われた恒例の当協会「クリスマス会」にもご参加いただき、元気なお姿といつもの笑顔を我々に見せてくださいました。

またそのほぼ一週間後も横浜の小料理屋で黒崎さんを囲んで簡単な「忘年会」を仲間内だけで開きましたが、黒崎さんはいつものように焼酎をオンザロックで、またお湯割りで楽しんでおられました。

あまりにも突然の訃報に接し、信じられない気持ちとやるせない思いでいっぱいでありました。黒崎さんの突然の旅立ちを今でも現実のことと受け入れられない自分があります。

横浜日独協会は2010年10月に、今からほぼ15年前に設立されました。正にその中興の祖の一人が黒崎さんでした。当協会が現在200社/人近い大勢の会員を擁する大きな組織へと短い期間で発展したのも黒崎さんのお尽力があったからこそと心から感謝申し上げたいと思います。またその設立後に当協会に入会する機会を与えていただいた私も、個人的には黒崎さんから様々なご指導を頂き、正に「人生の師」として多くのことを学ばせていただきました事が大切な財産として心に深く残っています。本当に有難うございました。

黒崎さん、安らかにお眠りください。天国に行かれてからもお好きな「焼酎」を楽しんでください。いつかまた一緒に楽しく杯を傾けることができることを楽しみにしていますね！

不肖の後輩より



島村武男先生 追悼コンサート 2024年12月28日 磯子公会堂

ドイツのエネルギー事情

顧問 大瀬 克博

ドイツの総選挙が終わり政権交代となります。新政権は内政面では経済悪化、難民問題、インフラの劣化、エネルギーなど難題山積のスタートになります。昨年12月のARD国民アンケートで国民の半数近くが挙げた最重要政策が経済問題でした。ドイツ経済回復の重要な鍵がエネルギー政策です。

2010年、第2次メルケル政権は地球温暖化防止のためエネルギー転換（エネルギーヴェンデ）に基づく「化石燃料・原子力の依存脱却と再生可能エネルギーの導入拡大」を進めてきました。エネルギー転換は2021年12月に発足したシュルツ連立政権に引き継がれています。その目標値は下記です。

	メルケル	シュルツ	*) 日本
再エネ比 2030	65%	80%	40%
石炭火力	2038 全廃	2030 全廃	—
原子力発電	2022 全廃	同左	2030 20%
温暖化ガス 2030	65%減 2019 比	同左	46%減 2013 比

*) 2025年2月策定エネルギー基本計画

2023年のドイツ再エネ比率は総発電量の52.5%となり加速されましたが、一方で電気料金高騰の一因ともなりました。ドイツの電気料金は2022年に既にヨーロッパ最高レベルになり、2023年以降も更にアップしています。

現在の経済悪化主因がエネルギー価格、特に電気料金の高騰です。企業の海外脱出と業績悪化、そして物価高による生活難をもたらしています。ブルームバークの最新調査では2010年以降のドイツ資本の海外流出は100兆円を超すとされ、主因が高い電気料金、その原因が再生可能エネルギー政策とウクライナ情勢と述べています。

昨年12月に行われた国民アンケート調査（ARD）で経済状況が悪いと考える人は83%に上りました。総選挙で重要と考える政策のトップが経済問題で全体の45%、3年前に比較して38ポイントのアップ、そして環境保護は12%と21ポイント減となっています。

また、連邦会計院は2024年3月の特別報告でエネルギー転換が軌道に乗っていないことを指摘し、安定した供給が脅かされ、電気料金が高く、エネルギー転換の環境影響が十分に評価されていないと批判しました。

脱原発と石炭火力廃止の代替電源はロシアの安い天然ガスによる発電を考えていました。しかし、ウクライナ戦争の勃発で不可能となり、代替供給先の確保と価格高騰対策を強いられることになったのです。

再エネ増に貢献したのが北海の洋上風力です。ドイツの電力は寒い冬に増大します。冬場の北海は風が多く風力発電量が減り近隣諸国からの電力輸入量が増大します。

日照時間が長く風に恵まれ、電力需要が減る夏場の時期は発電量が需要を上回り電力は輸出に振れます。ドイツの電力系統はヨーロッパ系統と連係されています。発電量が増えた時は近隣国に溢れ、不足する時は他国から流れ込みます。再エネは制御できません。極端な変動は他国へ悪影響が及びます。再エネ期待の洋上風力は需要地と離れた北海に建設されます。電力輸送のため長い海底ケーブル、直流変換設備など付帯設備が必要です。需要地に近い火力、原子力では不要です。

太陽光、風力の設備出力が年間発電量に寄与する利用率は火力、原子力発電に比べて低く、同じ発電量を供給するために数倍の設備が必要になります。再エネは制御できず、それを調整する設備も必要です。今は主に石炭火力が担っていますが、将来は水素、バッテリーが担います。

これら再エネの特性がコストプッシュ要因です。この解決に期待されるのが水素です。ドイツは積極的に取り組んでいますが再エネ普及に追いついていません。新たに策定した水素2030計画で普及を加速します。

世界は安全で経済性に優れた脱炭素電源として新型炉、小型原子炉など原子力開発と建設に舵を切っています。日本は2030年に原子力20%の計画です。ドイツの国民調査では福島事故後の2011年は脱原発に賛成が86%と大多数でした。近年の調査では原発肯定派が増え昨年の調査では過半数を占めるまでになっています。総選挙で第1党となったキリスト教民主同盟CDUのメルツ党首が昨年夏に発表したマニフェストで再エネに加え原子力の拡大を掲げました。そこに新型炉、小型炉が明記されています。大きな方向転換です。第2党ドイツのための選択枝AfDも原発再開を主張しています。2011年の脱原発は専門家の意見を聞くことなく政治主導で決められたとの批判もあります。原子力再開は容易ではありません。原発再開のためヒト、モノ、技術の原子力インフラは大丈夫か、電力会社そして原子力関係者が取り組む意思を示すかが問題です。

原子力発電への懸念は放射能です。放射能リスクが低く安全、エネルギー発生量が格段に大きく脱炭素電源として期待されるのが核融合発電です。アメリカ、英国、中国、ドイツ、日本など各国が2040年以降の実用化を目指し開発しています。ドイツは昨年2024年に開発プログラム“Fusion2024”を立ち上げました。世界有数の研究機関が開発に取り組んでいます。AI時代を迎えエネルギー需要は高まります。その中でエネルギーの安定供給、経済性そして地球環境保護は更に重要性を増します。実業界、研究機関など総力を結集して取り組む必要があります。ドイツは技術先進国として国力を育んできました。底力を発揮してドイツが次世代エネルギーで世界をリードする、それが期待です。

経済危機を脱却して前進する、ドイツに時間的余裕はありません。原子力再開には時間がかかります。新政権は現実的なエネルギー政策の立案推進を行うと考えます。

クリスマス会

2024 年 12 月 14 日

会員 高雄 綾子

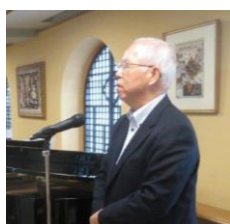


はじめての横浜日独協会のクリスマス会、場違いだったらどうしよう…と緊張しながら元町の霧笛楼に足を踏み入れると、そこはとても温かい雰囲気であふれていました。ドイツの民族衣装で流ちょうに司会をなさる南雲さんをはじめ、横浜日独協会のみなさまのあふれるホスピタリティ、アルテリーベの歌手の方の素晴らしいドイツリート、そしてもちろんおいしいお料理のおかげで、とてもリラックスした素晴らしいクリスマスを過ごすことが出来ました。



最初に成川会長の開会のスピーチをお聞きして、難しい時代において日独交流の重要性がますます高まっていることを実感し、微力ながらも大学でドイツ語教育に携わる者として、より一層真摯に取り組む必要性を再確認しました。

が、そんな教員の真面目な(?)思いをよそに、一緒に参加した大学生達は、日本にいながらにしてこのようにドイツ語やドイツの文化に触れられるこの機会を、目一杯楽しんでくれたようです。



クーグロックンの体験演奏では学生を優先的にご指名くださったり、途中から他大学の学生同士の交流テーブルをもうけて、楽しいトークやクイズなどの参加型プログラムを展開してくださったことで、ドイツ滞在のご経験豊富な方々が、若い学生に楽しさを伝えようとしてくださっているお気持ちが本当に伝わってきました。そのおかげで、ふだんのドイツ語の授業では見られない学生達の笑顔をたくさん見ることができ、やはり人と人とのいきいきした交流が、外国語教育、そして異文化理解において最も重要だということを、改めて実感したひとときでした。

今後、世界情勢が混沌とし、経済状況も不安定化するなかで、留学や旅行でドイツを訪れることが難しくなる

事態も予想されます。それでも今回のクリスマス会で体験した音楽や交流が心に残ることで、ドイツと関わろうとする気持ちを持ち続けられれば、将来の日独交流に大きな意味を持つことなのでしょう。このような場にご一緒させていただきましたことを、心より感謝申し上げます。

以下は、学生からのメッセージです。

=====

大学でドイツ語を勉強していますが、座学ではどうしてもすぐに忘れてしまう部分があります。クリスマス会では歌やドイツの文化の一部など、日本との違いの部分を知ることができて興味深かったです。

=====

先日は、素敵なクリスマス会にご招待いただきありがとうございました。素敵なお料理を頂きながら学生や先生方、日独協会会員の方々と交流することができとても良い機会でした。特に生演奏の音楽がとても良かったです。たくさんのレク企画、また席順などたくさんの心遣いをいただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

=====

クリスマス会にご招待頂きありがとうございました！私はドイツ語で歌ったり、ベルを演奏したことが特に印象に残りました。改めて音楽は人を繋げる良い文化交流だと思いました。また皆さんが明るく楽しそうに参加されていたことも印象的でこのような場がいかに大切かを実感しました。今後、このような場が多くの方に届き、日独交流が深まるきっかけになって欲しいです。私たち若者も一緒に盛り上げていければ良いと思います！



海外で日本学をきずいた人々

常務理事 寺澤 行忠

ロシアの大富豪の家に生まれたセルゲイ・エリセーエフ(1889-1975)は、ベルリン大学留学中に新村出(『広辞苑』の編者)に会い、日本留学を決意する。東京帝国大学国文科に学び、夏目漱石や小宮豊隆らと親交を結んだ。

帰国してサンクトペテルブルク大学で日本語教師となったが、ロシア革命に遭遇し、フィンランドに亡命する。その後フランスに渡り、ソルボンヌ大学に職を得て日本の作家の作品を翻訳し、日本の文学を西洋に精力的に紹介した。

1932年にアメリカに渡り、ハーバード大学で日本学の講座を担当することになった。ここでDonald・キーン、サイデンステッカー、ライシャワーら多くの人材を育成した。



ライシャワー夫妻

エドウィン・ライシャワー(1910-1990)は東京で生まれ、高校時代まで日本で過した。ハーバード大学でエリセーエフなどに学び、その後パリに留学してから来日、東大と京大で特別研究生として学んだ。その後、円仁の『入唐求法巡礼行記』により博士号を取得し、ハーバード大学教授となる。

また明治の元勲・松方正義の孫である松方ハルと結婚した。

1961年には駐日アメリカ大使となり、良好な日米関係を築くことに尽力したが、在任中暴漢に襲われるという不運に見舞われた。精神異常者はどこの国にもいるとして、こうしたことが両国の関係を損ねることがないようにとの心遣いを示した。

日本・中国・朝鮮の広いフィールドを研究領域とし、日本人が自尊と自虐の両端を往来する傾向があることを指摘して、国際人としての自覚を促した。



朝河貫一(1873-1948)もアメリカで早くから日本学を担当した一人である。彼は東京専門学校(後の早大)卒業後アメリカに渡り、1907年からイエール大学で日本文化史を担当するようになった。1937年にアメリカの一流大学では日本人として初の教授に昇進した。

彼は日本法制史などの研究とともに、日本の正しい姿を世界に示すことに情熱を燃やし、日露戦争に際しては、英文の著書や講演を通して、日本の正義を欧米に対して説いた。しかし日露戦争後の日本のアジアに対する強圧的な姿勢に、欧米の批判が強まっていることに危機感を抱き、日本に対しては自重を促した。

第二次世界大戦に際しては、日米開戦は何としてでも避けたいとの思いから、日本の要人に何度も手紙を書き、一方でアメリカのルーズベルト大統領に働きかけ、戦争回避のための努力をそれぞれに要請した。

存生時には日本で一般にあまり知られていなかったが、近年になって、彼の功績は改めて高く評価されている。



コロンビア大学における日本学の歴史は、角田柳作(1878-1964)に始まる。角田も東京専門学校を卒業後、ハワイを経てコロンビア大学に学び、日本文化

を知る必要を痛感する。日本に帰り、各方面から日本学を成立させるための寄付を募り、大量の日本図書を購入してコロンビア大学に寄贈した。それをもとにコロンビア大学は1931年に日本学研究所を開設し、角田を講師に迎えた。ここにコロンビア大学の日本学が始まる。そしてDonald・キーン、サイデンステッカー、歴史学者ハーバート・ノーマンなどを指導した。

Donald・キーンは、角田がある時期、教室ただ一人の学生であったキーンのために、毎回山のような参考文献を机の上に積み上げ、黒板を真白にして熱心に講義してくれたこと、それが比類もない名講義であったことなどを著書に記している。



ドイツでは、ヨーゼフ・クライナー氏(1940~)が日本学の方針で活躍している。ウィーン大学で民族学、日本文化を専攻した。東大に留学後ウィーン大学で博士号を取得、ウィーン大学教授になった。また1975年から79

年までヨーロッパ日本研究協会(EAJS)の会長を務め、1977年にはボン大学教授に就任した。1988年からは東京でドイツ日本研究所の初代所長を8年間務めたが、その後法政大学に特任教授として招かれ、旺盛な研究活動が続けた。2015年には同大学に、海外の若手日本研究者を顕彰するヨーゼフ・クライナー博士記念日本学賞が設けられた。

欧文の著作も多いが、日本語による出版も『江戸・東京の中のドイツ』(安藤勉訳、2003年、講談社)をはじめ、多数に上る。

会費納入・ご寄附のお願い

2025年度の会費の納入をよろしくお願いいたします。同封の払込取扱票で、4/1～6/30の期間内にお振込ください。会員の皆様とともに草の根の国際交流をすすめていくためにはこの会費はとても大切です。ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

横浜日独協会へのご寄附も宜しくお願い致します。

※ご寄附いただきますと、確定申告時に最大50%の税制優遇を受けることができます。

会費・ご寄附は、下記口座へのお振込みにても受け付け致します。

- ◆ 郵便振替口座： 00240-3-138647
- ◆ ゆうちょ銀行： 店名〇九八（ゼロキュウハチ）
番号2441596
- ◆ 横浜銀行： 横浜駅前支店 普通6416667

鎌倉散策

文化委員会

3月に計画しておりました鎌倉散策の会を、改めて実施いたします。

【日時】2025年6月4日(水)

【集合】10時 鎌倉駅東口 改札口を出たところ

ご参考：JR横須賀線 横浜駅(9番線、湘南新宿ライン) 9:27→保土ヶ谷 9:30→東戸塚 9:35→戸塚 9:39→大船 9:46→鎌倉 9:53

- ・鎌倉駅東口から京浜急行バスに乗車 浄妙寺下車
- ・10:30～11:30 報国寺(竹の寺)庭園散策
- ・12:00～13:30 浄妙寺境内の「石窯ガーデンテラス」にてランチ(例)3,200円(税込み)で、各種フルコース・ランチあり
- ・14:00～14:40 一条恵観山荘(重要文化財)庭園散策
- ・15:00頃～ 鎌倉駅周辺にてティータイム、のち解散

【参加申込】5月31日(金)までに、中尾尚未文化副委員長へお申込み下さい。

E-mail: naomint2013@gmail.com

文化委員会企画

教養講座「日本文学逍遙」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- ・4月2日(水) オンライン講座
- ・5月7日(水) 休会
- ・6月4日(水) 休会
- ・7月2日(水) オンライン講座

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

イベント予定

■4月 イベント：

- ・日時：4月19日(土) 15:00～16:30
- ・会場：オンライン (Zoom)
- ・講師：草野 智洋氏 琉球大学人文社会学部准教授
臨床心理士、公認心理師、日本ロゴセラピスト協会認定A級ロゴセラピスト
- ・演題：何があっても「それでも人生にイエスと言う」ことができる ～ロゴセラピーのご紹介～
ナチスの強制収容所を生き抜いたユダヤ人の精神科医ヴィクトール・フランクルは、強制収容所という極限状況においても「それでも人生にイエスと言う」という言葉を残しました。本講演ではフランクルの創始したロゴセラピーの考え方について、わかりやすくご紹介します。
- ・参加費：無料 会員以外の方もご参加頂けます。

■5月 イベント：

- ・日時：5月17日(土) 15:00～16:30
- ・会場：戸塚区総合庁舎3階多目的スペース大
- ・講師：石倉 昇氏
日本棋院棋士九段、元東京大学客員教授
- ・演題：世界に広まる囲碁の魅力(仮)
アインシュタインもたしなんだ囲碁は、今や世界6500万人が楽しむゲームです。囲碁の魅力、世界の囲碁事情、教育と囲碁、囲碁の歴史などを楽しくお話致します。
- ・参加費：1,000円 会員以外の方もご参加頂けます。

■6月 イベント：

- ・日時：6月21日(土) 15:00～16:30
- ・会場：フェリス女学院大学緑園キャンパス 2405教室
- ・講師：矢野久美子氏 フェリス女学院大学
国際交流学部／グローバル教養学部教授
- ・演題：危機の時代とアーレントの思考
今、人権や多様性や事実そのものなど、人間の共生において大切なものとされてきた価値が、あからさまに蔑ろにされつつあります。この時代のなかで思考することの意味を、アーレントの言葉から考えたいと思います。
- ・参加費：無料 会員以外の方もご参加頂けます。

認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2025.4.1 (第74号)

所在地：〒247-0007

横浜市長区小菅ヶ谷1-2-1 地球市民かながわプラザ

NPOなどのための事務室内 事務局：津澤

Tel: 080-7807-7236

会報編集責任者：山口 利由子

E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com

横浜日独協会ホームページ <https://jdgy.sub.jp>



法人会員(順不同)

株式会社文芸社	ウインクル株式会社	ボッシュ株式会社	トルンプ株式会社	公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見	モトスミ・ブレイメン通り商店街振興組合		横浜国立大学一成長戦略研究センター	
株式会社コトブキ	神奈川大学	日本バウシュ株式会社	一般社団法人如水会 横浜支部	日独産業協会(DJW)
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株)		富士・フォイトハイドロ株式会社	フェリス女学院大学	